

どこへも行かぬロケットの話

越後 まつ子

そうだけでなく、僕はその新しい家でお茶が飲めるんだ。それだけで十分じゃないか。

新しい家の設備が水道とトイレしかないことを知って以来、僕はいま手元にある電気ポットと急須のことを友達ちのように思うようになった。電気ポットは水を汲んで電源を入れるだけでお湯の沸く魔法のような鉄筒だ。急須は数年前、親類から譲り受けた年代物だった。しかし新天地には水さえあればいい。まさか電気が通っていないなんてことはないよな、と念には念を入れてもう一度パンフレットを見た。そこには電気ありともなしとも明記されていなかった。トイレはありと書いてある。しかし風呂なしとは書いていない。これは、都合の悪いことは書かない方針なのかもしれない。自家発電の術も考えておかなくちゃと思ったところで、テレビアンテナありの文字を見つめる。ということは、よっぽど意地悪な設計者でなければ、電気は通すだろう。テレビは電力がなければただの重い箱だ。自分の重そうなブラウン管テレビを眺める。そういえば僕はその部屋に風呂がないことをどうやって知ったのだったか。

まもなくお湯が沸いた。急須にそそぐ。どうしても解

決しなければならぬことはあるけれど、どうにかしてやっつけていかなければならぬんだ。

僕はここを離れねばならず、それはもう一週間後のことだ。今の家は特に便利というわけではなかったけれど、長いこと住んだから愛着は十分に湧いた。立てつけの悪い押し入れも一度も使わなかったリビングの換気扇も、何だか愛おしい。僕は一度くらいと思って換気扇のスイッチに手を伸ばすが、埃がまき散ったらどうしようと思い、その手をそのまま電気ポットに向けた。お茶をカップに注ぎながら、そういえばこの換気扇を使わなかったのも、初めから埃の件が心配だったからということを出した。本当に一度も点けなかったものだから、もしかしたらねずみの親子が住んでいるかもしれない。母ねずみに父ねずみに、ねずみ講というくらいだし子どもはきつとたくさんだろう。

引越す前に張り紙をしていこうか、「家族あり、つけるべからず」全部カタカナとか、それとも新聞を切り抜いておどろおどろしく仕上げればきつと大家さんも次に住む人も、換気扇をつけようとは思わないだろう。ついでにお札でも貼っておこうか。その場合お札はなんと書いてあるやつがいいかな、家内安全とか、なんてそんなことを考えているうちにチャイムが鳴った。りんごん。僕はチャイムの音に必ず怯えてしまう。宅急便が届くとか友人が来る予定があるとか、そういう場合でも、と

りあえず怯えてしまう。

まず、りんごん、この音が良くない。普通のチャイムよりも少し低い音だ。鐘が大きく揺れて一度鳴り、平行へ戻ろうと引き戻されてもう一度鳴る、それを摸したらしい音だった。しかしこれは本物の鐘じゃない、りんごん、の間に少し間がある。聞けば聞くほどその嘘くさが耳につく仕様だ。

でもはじめは違った。その音が好きだった。なにせ「このチャイムの音がいい」と桃に言われたから、だからこの家にしたのだ。それが十割とは言わないけれど、六、七割くらいはそれだ。とにかく好きだった。なのに、あれを境に嫌いになった。

嫌いになる前、りんごんと鳴った扉の向こうには桃がいて、「やあ」とか気の抜けた挨拶をする。桃の手には読みかけの本が収まっている。それはほとんど小説で、でも図書館でばかり借りてくるから全集サイズなのだ。それを桃は僕の家への道すがら読み、チャイムを押す。りんごん。「やあ」「うん」「ごはん食べにきたよ」「うん」

そうして招き入れられた桃は、まっすぐ桃専用のクッションへ向かいそこで読みかけの本をまた開く。桃はいつも僕の家へごはんを食べに来ていたが、来る時に食材を買ってくるとか、今日は自分が料理を作ろうだとか、一度だってそういうアイデアを持ってうちのチャイムを鳴らしたことはなかった。そうやって彼女はいつまで

も三島由紀夫や大岡昇平なんかを読んでいた。彼らが特に好きだったというわけではなかった。桃はひどく暇で金のない一般的な学生だったのだ。桃の読む全集の巻が正確に一ずつ上がっていくのを見るとなんだかほっとした。三の次が四だからという理由で、当然のように「痴人の愛」なんかを凝視していた桃。いつまでもそうだと思っていた。もう桃のクッションは無い。りんごん、部屋に響く回数もいぶん減った。

ここに越してきてから数ヵ月たったある日のこと、チャイムの音を聞いた桃がもう一度「いい音だね」と言った。僕はこの音の鐘を模した出来損ない具合がちょうど気になりだしていた時期だったので「そうかな」と答えた。

「最初は僕もいいと思ってたけど、でもこれちよつと空回ってるよ。聞いてて恥ずかしくなる」

すると桃はふつと笑った。それは嘲笑のようにも取れなし、親が子どもを可愛いと思うときの笑みにも取れた。その二つは大して違わない。子どもを可愛いと思うとき、きつと思考の隅っこには嘲りが隠れている。とにかくそのとき、桃はそういうふうに笑った。

「桃は最初からそこがいいと思ってるんだよ。かわいじゃない。ありふれたびんぼんって音だったら面白くないよ。それに鐘の真似をしきれていないところとかいいよね。鐘は途切れず響くのに。でもそういう本質的な

躓きに気づくことなく、ずっと鳴り続けるんだよ。古く
なつて人が住まなくなるまで」

僕には桃の言うことがよく分からなかった。曖昧な相
槌を打つたら、桃は一度肩をすくめて微笑み、そのまま
何も言わず、開きっぱなしの本のページに目を落とした。
時折、僕は桃の言うことをまったく理解できないことが
あった。それが常というわけではなかったはずなのに、
今思いつけるのはそういう思い出ばかりだった。

最後のあの日もそうだ。

それはやけに重苦しい雨が降っている日だった。来る
はずの桃は昼になつても現れず、チャイムは凍り付いて
いた。

その日は朝から一人で家にいたのに、なんとなく誰か
に見られているような心持がしていた。気になつて、ま
ずカーテンを手繰り窓の外を見た。猫一匹いなかった。
雨脚は強くなかったが、風があり、線の細い雨粒が窓に
張りついていて、カーテンを閉じる。妙な感覚は消えて
いかなかった。次にドアスコopを覗いた。誰もいない。
僕は半ばふざけて、冷蔵庫やレンジの中を覗いてみた。
たぶん恐ろしいほど暇だったのだろう。そんな処に何か
がいたら絶望的に怖すぎるが、あれはまだ昼間だったし、
僕は時々、誰に見せるわけでもないのに一人でふざける
癖があった。そうして、とりあえず覗けるところをそこ
ら中、開けては確かめて、また閉めていた。押し入れの

中、電気ポットの中、洗濯機の中。鍋の中を覗いていた
ところで、ドアをカツカツ、引つ掻く音がした。僕はも
う一度ドアスコopを覗いてみた。桃がいた。全身がぐ
っしより濡れていて、短い髪からは水が滴っていた。僕
は慌ててドアを開けた。「どうしたの」尋ねても桃はびっ
くりしたような顔でこちらを見ているだけだった。

ねえ、どうして桃びしょ濡れなの？ そう訊かれてい
るようだった。「傘なくした？」そう尋ねても桃は首を横
に振った。

違う。違くて。じゃあどうしたの？ 僕らは言葉のな
いまま、しばらく視線だけで会話していた。

「知ってた？」ようやく喋った。知ってた？ 何を？

「ねえ、地球をずっと歩いてても宇宙へは行けないこと、
知ってた？」

「そんな気はしてた」

「そう。でもね、なんとなく人生の内に光年の単位を足
で歩けるとしたら、桃、何となく月くらいへは行けると
思ってた。新聞紙だつて五十も折れば月に届くタワーに
なるんだから。みんなだつて、なんとなくはそう思つて
いたんじゃないかな。頭のまともな部分で分かつても、
気付かないうちに魔術的になつてることって、人って誰
でもあるんじゃないかな」

「そうかもね」

たとえば朝から正体不明の視線を感じていること、た

とえばレンジの中を覗いたりすること、そういうことだろうか。

「でも宇宙へは行けないみたいなんだよ」

うん、そうか。そう言われると少し残念な気がする。「それで、これは誰でも思うんじゃないかな、宇宙の外側に何かあるのかって。これも今のままじゃ絶対に無理なんだよ。分かるわけないんだ」

「なぜ」

「なぜって、ばかだな。箱の中に宇宙が入っているわけじゃないんだから。でもそれは今のままじゃ無理だという意味だよ。考えてみなよ、昔の人は月をなんだと思っていたと思う？ 地面をなんだと思っていたと思う？ まさか地球を離れて月に行けるだなんて。ロケットって画期的だよ。移動を横から縦にすることで人間は堂々めぐりの地球の旅を終えることができたわけで。だからもし宇宙の外に行きたいんだとしたら、もっと画期的にならなきゃ駄目、縦と横だけじゃなくってさ。」

人は少しずつ遠くへ行っている。宇宙の外へ行くこととタイムマシンをつくること、どっちが簡単なことかな。桃はアインシュタインを尊敬してる、昨日からずっと尊敬してる」

桃はそこまでを一息で言った。頬から幾筋も雨粒が流れた。

「分かる？」

「ちよつとだけ」

NOが滲み出た僕の曖昧な応答に桃の体は膨らんだ風船がパンクしたみたいにみるみる縮んでゆき「そっか」とだけ言った。そしてそのまま僕に背を向け、とぼとぼと雨の中を帰っていった。「ちよつと桃」僕の呼びかけは霧雨の濃い湿度の中に溶けていつてしまった。

それきり桃とは会っていない。連絡はつかず、学校は休学、知らぬ間に除籍となっていた。桃と僕との間に共通の友人はなく、何とかして見つけた桃の知り合いは、言っていることがみなちぐはぐだった。ある人の中では、桃は大陸へ渡り、ツリーラインの更に上で羊の番をしていた。他にも、借金がかさんで行方をくらませたんだよと言う人もいたし、砂漠に緑をかえす活動に参加しているよと言う人もいた。それに、単純に死んだよと教えてくれた子もいた。他の人の言っていることに比べるとその言葉はとても親切に思えた。だから僕はその子の言葉を最後に桃探しをやめた。すると身体の中に張り付いていたものが全て剥がされてしまったかのように、ひどく気が楽になった。それはとても爽快な気持ちでもあったけれど、無理に瘡蓋を剥いだ時のようにどこかの器官は確実に傷んでいた。何がいけなかったのか、何故痛んだのか。僕は考えることすら止めてしまった。

それからすぐに、桃のクッションとクッションの下から出てきた文学全集第五巻と、長いこと置き去りになっ

ていた服と残されていた奇妙な文字列のメモと、それから細々としたたくさんの忘れ物をゴミ袋に詰めた。袋の口を縛りながら、この服を着ずに、その時桃は何を身につけて帰ったのだろうかとか、全集は印の押してある図書館に返した方が親切なのだろうかとか、それと謎の文字列の意味をほんの少しだけ考えてみた。M78と太い鉛筆で書かれていた。どこかで聞いたことがあったけれど、口を縛りきった途端に、もう忘れなければという気持ちが始まるで義務のように湧き出てきた。湧き出た義務感はずつと煮えたぎり、しまいには怒りになった。

チャイムだつて、スピーカーのカバーを外して燃やしてしまいたかつた。表のチャイムのボタンだつて、出来ることならむしり取って遠くへ投げてしまいたかつた。でも何をするともないまま次のゴミの日は来た。そういうわけでチャイムは今も家の表に貼りついていて、どこを通っているのか、リビングにひよっこりスピーカーが顔を出している。僕はあの雨の日、このチャイムに見られていたのだろう。

チャイムに怯えるようになってから、僕はたぶんこのりんごんという音が鳴る短い間に、微かなながらも二度、別々に怯えている。りん、にひとつ。ごん、にひとつ。

だから僕はこの日鳴った一つのチャイムに、またもや二度怯えた。身を固くして、少しだけ桃のことを思い出していたらチャイムはもう一度鳴った。これで四度だ。

どうして一人のお客に四度も驚かされなきゃならないんだ。その二度目のチャイムに軽い苛立ちを感じながら僕は立ち上がり、玄関へ向かった。ドアスコープを覗く。上背のある男が、片手で髪を、片手で携帯をいじりながらドアが開くのを待っていた。男は一度「おい」と言った。彼の髪は持ち主に恨まれているかのように執拗な脱色を受けているらしく、擦り切れたような色をしている。口はガムを噛む動きをしていて、指には濃い青のマニキュアが塗られていた。僕は観念して鍵をあけた。

「ああ、何の用さ」ああは友人と言えば友人だつた。僕の幼馴染で、何度切つても向こうが勝手に結びなおしてくるような腐れ縁だつた。きつと呪いのかかった人毛で縁は編まれているのだろう。

「おい、新聞屋じゃないよ、チェーン外して」

僕は表情を変えないまま動かなかった。今自分の顔を鏡で見たら、それは出し忘れたゴミを見つけた時のような顔だつたのだろう。チェーンを外そうとしない僕を見て、ああは隙間から手を突っ込んできた。彼の指は異様に薄くて長い。窓辺に吊るしたらきつと簾になるんじゃないかな。でもこんなに喧しくて髪の痛んだ簾なんてまっぴらだな、そんなことを思っている間に彼は自分で人の家のチェーンを外し遂げた。

「お前は新聞屋になつたらいいよ」外されて、申し訳なさそうに垂れ下がるチェーンを見て呟いた。ああは笑い

ながら、忍び込んだ指と同じような仕草ですりりと家に入ってきた。

「引越すって聞いてさ」あおの履き潰されたジーンズはいろいろなところの土を含んでいて、旅人のように思えた。

「あおってジーンズ洗ったことある？」尋ねるとあおは軽快に笑った。何かを言うのかと思つて少し待ったけれど、あおは笑つただけだった。

「なんだ、ぜんぜん片付いてないじゃん。引越すつてあれうそ？」

「まだやっていないだけだよ。てゆうか」

あおが旅人ジーンズから、同じくゴミを渡つた後のようにくたびれた旅人のような煙草を取り出したので、僕はそれを取り上げてゴミ箱に投げた。

「誰から聞いたの、引越すつて」

「お前の母ちゃんから。電話するといろいろ教えてくれるから」

たぶん、あおはここ数年息子の僕よりも僕の母と会話している。あおは何てことないような仕草でゴミ箱から煙草を引つ張り出した。僕はまたそれをひったくり、近くにあったコップの中に突っ込んだ。あおは軽快に笑つた。僕はうんざりした。

あおのこういうところが嫌だった。ほぼ年齢ほどの年月をそれなりに共に過ごしてきたというのに、未だに僕

の嫌煙を理解していないところ。ゴミ箱でも人の実家でも平気で漁るところ。そしてこの世の誰よりも自堕落な生活をしているというのに、数億キロ歩いた榮譽ある旅人のようななりをしているところ。

「じゃあまだ荷物の整理できてないんだ」

「そうだよ」

「なーんだ、あーあ」

「なんだよ」

「まあいいや。要らないテレビとか、パソコンとかあつたら言えよな。売ってきてやるからさ」

僕は返事をしなかった。あおは毎回、僕の引越しをどこからともなく嗅ぎつけて、その都度手伝いと称して人の持ち物を売り、随分な額の上前をはねていた。問い詰めてもしらばくれるのでだんだんと僕は面倒になつてきて何も言わなくなつた。

あおは昔からしらばっくれるのが苛立たしいほどに上手かった。

あれは夢の出来事かと思うほど昔のことだ。思い出は単純になり蔦が這い出し、ついでに額縁がかかつて、真面目にやればBGMだつてついてくる。でも美化はされない。フィクションにもならなかった。僕の左手首から肘のところまで伸びる三十センチ以上の縫い傷の痕が消えない限り、それは現実的な思い出だった。

子どもの頃のあおと僕は、今よりだいぶ仲が良くて、普通の友達のように遊ぶことだってあった。「おーい」と家の外からあおが呼ぶので僕は窓から顔を出す。あの頃のあおは清潔なジーンズを履いていて、髪も若葉のようにつやつやしていた。僕は一般的ななりをした子どもだった。木登りが好きで、いたずらが好きで、人に勝つことが好きだった。

その日、僕は一番高い木に登った。それは近所の子どもたちが塔の木と呼ぶ、近くの建物の何より高い楡の木だった。僕の後からあおが登ってくる。次第にあおとの距離が空いてくる。負けることが嫌いなあおは、登っている途中で「おい」だの「待てよ」だのと叫んでいた。木登りは一人でやるものだ。次々現れるくねった枝に相應しいやり方で足をかける。コアラの子どものように木肌にしがみつく。出来るだけ太い枝につかまる。そういうふうには目の前に現れる様々な状況に対処していかねばならない。後ろのやつやつの言うことなど聞いていられない。僕は登り続けた。ずいぶん枝が細くなってきた。頂上を見上げた。緑に囲まれた空が僕を見下ろしていた。その時、がくと胴体から頭が抜けたような錯覚をする。あおが僕の足を払ったのだ。見上げていた空はみるみる遠ざかり、頂上は緑の扉に締め出された。びっくりしたような顔でこちらを見下ろすあおの手はしつかりと太い枝を掴んだまま、落ちる僕へと伸べられることはな

かった。あおがぎゅっと木の枝を掴んでいるのを見て、自分も何かを掴まなければと手を宙へ向けて闇雲に動かした。夢中で動かしながら、でも頭では別のことを考えていた。たとえば昨日の晩御飯に出たスーブのことを思った。たとえばクリスマスにもらった車のおもちやを思った。幼すぎて走馬灯と言えりほどの思い出がなかったのだろう。

滑り落ちた時と同じくらい突然に落下がとまる。頭が首から転がりそうになるほどの衝撃を受ける。地面に叩きつけられる前に僕の右手は人の腕のような太い枝を掴んでいた。

しばらくして上からあおが下りてきた。あまり慌てた様子はなく、きまり悪そうにうっすら笑ったような顔をしていた。そして地上に降りて、僕の足を持ってゆつくりと下ろした。あおの視線が左手に注がれている。構わず僕は「あやまれよ」と怒鳴りつけ、掴みかかろうとしたが、振り上げた手の赤さに体は動くのを止めてしまった。僕の左腕は口をあけた怪獣のようにぱっくり裂けていた。血は筋になつて地面にたれていた。二人ともしばらく何も言わなかった。のんきなトンビの鳴き声が目の前の出来事を現実から遠のかせた。

突然何かに気づいたかのようにあおは大きな口をあけ、「待ってろよ」と叫んで家の方へ駆けていった。走り去るあおを見ていたら、じわじわと痛みが広がってきた。

救急車を呼ぶのだろうか、あおも僕も両親が共働きだったので大人が来ることはないだろう。張り詰めていた緊張と恐怖と怒りがふつと解けて、僕は木の幹に寄りかかり座り込んだ。目を閉じて、じんじんと鳴る傷の痛みに合わせて呼吸をした。足を払ったあおを怒る気概も残っていないかった。

しばらくして駆け足の音が近づいてきた。あおだろうと思い、続く救急車のサイレンを待った。目を閉じたままの僕を見てか、あおは力強い声でもう一度「待ってるよ」と言った。うん、待ってるから早く何とかしてくれ。

心臓がなるたびに血が流れていく気がするんだ。

そして次にあおが放った言葉が、僕とあおとを二十一年先にまで渡って引き裂くこととなった。

「縫っちゃえば元通りなんだよ」

あおは血の流れている左腕を持ち上げた。僕は夢を見ているのかもしれないと思いつつ、どっしりとした木の幹に身を委ねていた。すると裂けた左腕がもこもここと蠢いているような感触がした。腕を支えるあおの手は震えていた。蠢いたあとは皮膚が突っ張る。相変わらず傷口は心臓の音に合わせて痛む。僕は恐る恐る重い目蓋を持ち上げた。赤い血の中に黒いぎざぎざ模様が這っていた。それはあおの描いた下手な蛇の絵に似ていた。思い出はそこで終わり、エンディングは僕の知らない光景だ。まずあお以外のまともな友人が通りかかり、続

いて彼の家のまともな大人が呼ばれ、まともな救急車の音が響く。地域で一番高い楡の木の根元には、意地になって友人の腕を縫い針で縫い続けるあおと、数人のまともな人々と、時間とともに増え続ける無数の野次馬たちで埋められ、最後は空撮でエンドだ。主演・あお、被害者・僕、ヒーロー・まともな人々、エキストラ・野次馬。そんな思い出だ。それから僕はしばらく入院した。あおは一度も謝らなかつた。

事件後のあおの言い訳はこうだ。

「今朝、一〇番へのいたずら電話のニュースを見て、だから呼んでもすぐに来ないと思つたんだ。ここらへんには暇な悪い子どもがたくさんいるし、そういう子は暇になるとみんな一〇番かフリーダイヤルにいたずら電話をしているから」

お前みたいだね、ショックで言葉の出ない僕は頭の中で悪態をついた。

「それで一昨日、戦争の映画で、お母さんが縫い針で子どものおなかを縫ってるのを見たから、ああやれば良いんだと思つちやつたんだ」

悪びれもせずまっすぐ医者を目を見て喋るあおから大人たちは悪気は受け取れず、医者が「今度からは時間がかかってもいいから救急車を呼ぶんだよ」とあおの頭を撫でて事件は終わった。

おいあお。そのお母さんは針を火で焙つていやしなか

ったか。相当な決心のもとで子どもの腹を縫っていたんじゃないか。

「おいあお」

「あ、喋ったよ」

「あおが僕を木から落としたことは言ったのか」

あおは木の洞のようにぼかんと口をあけて、しばらく何も言わなかった。近くにいた医者も僕の母親もあおの母親も同じく驚いた顔をしていた。「何言ってるんだよ」

「ふざけて一人で滑ったんだろ。あんなてっぺんで、おれあぶないって言ったのに。おばさん、こいつ頭も打ってるかもしれないよ」

いかにも真実のようなあおの口調に僕は何も言えなかった。母親たちもすでにそのようにあおから事件の概要を聞いていたらしく、口の洞は僕へ向けての暗闇だった。僕だってはつきりとあおが足を払ったところを見たわけじゃない。それきりその話はしなかった。

それからあおは変わらず僕と遊ぼうとしていたが、こちらはあおを嫌うようになっていった。少しずつ嫌な部分を見るようになって、そのたびに扱いが素っ気なくなかった。あおは全く気にせず、むしろそれを面白がっているようだった。

風が吹いたら軋みそうな髪を持つ現在のあおは、人の部屋でどっかりと胡坐をかいて、片手で携帯を、片手で髪をいじっていた。「ねえ、まだ帰らないの」僕の言葉に

曖昧な返事をした。

話題を探して目線を彷徨わせたあと、名案を思い付いたかのようにあおは言った。

「桃って子は？ いまどうなってるの？」

「死んだよ」

「別れた？」

「ねえ、もう用ないだろ、帰れよ」

あおはにやけた顔でへえ、と呟いて「待ってるよ、今かわいい子見せてやるから」と言った。携帯を操る指のスピードが速まる。お前の待ってるよ、にはいい思い出がない。縫い針で腕を縫われるのはもうごめん、お前など待つものか。だいたい歴代のあおの彼女にまともなのはいなかった。あおは彼女が変わるといちいち僕に見せに来る。一人は腕に連綿たるストライプのある子だった。縫い付けてやればいいのにと強く思った。それにとんでもなく不潔な服装の子もいた。あおのように旅人にも見えない。真正正銘、自墮落ゆえの不潔さだった。あからさまに嫌な顔をしたら、あおはけらけら笑った。

「ほら、かわいい」

そう言ってあおは携帯の画面をこちらに向けた。そこには頭に赤いリボンをつけた、若葉のようにつやつやした髪の子どもが映っていた。

「…最低」

「ユキちゃん。もうすぐ二歳、おれの子ども」

「……」

「あれ、言ってなかった？」

知りたくもなかったけど、なぜこいつは自分の子を持つた後も幼馴染の引越越しを逐一チェックしているんだろう。そうじゃなくて。

「おまえが人の親になるだなんて」

子どもが哀れだ、絶望だろうな。そもそもこいつは職に就いていたか？ 母親はストライプだろうか、自堕落だろうか。どちらにしてもユキちゃんが哀れだ。

「これが奥さんのマキちゃん。桃ちゃんより美人だろ」

あおは画面をスクロールして次の画像を見せた。おれは目を見張る。あおに奥さんと言われた可哀想な女性は、確かに美人で身なりも正しく、日に当たって白く光った腕はきれいなものだった。

「……あおは今何してるの」

あおにあお自身のことを尋ねたのは何年振りだったか。今まであおのプライベートなどには、地面を這う蟻の行く末ほども興味を持ったことがなかった。

当のあおは嬉しそうに笑って、無邪気に「あのなあ」と話し始めた。

「おれは今あれだよ、東京で美容師やってるよ。二年くらい前に就職してさ、すぐに今の奥さんと会って、マキちゃんスタイリストやってただけ、ユキちゃん出来たから今は休んで……」

それから、あおはその二年間のことを際限なく喋りだした。仕事の話から始まり、今では店のチーフディレクターとか言う立派な地位にいること、マキちゃんとの出会い、同棲の経緯から結婚に至るまで。しかし僕は冗談のような眩暈に襲われて、途中からほとんど聞いていなかった。ただ、あおがとても幸せそうに話していたことだけは視界の隅に残った。あおの話がユキちゃんのくだりになると目じりが下がり、マキちゃんのくだりには年甲斐もなくはにかんだ。

思えば、最後にあおが僕を訪ねてきたのはいつだったか。ずいぶんしばらくぶりだったから、ドアスコープからあおを見たとき、少し意外な気がしたのだった。あおにはあおの二年間があったということだ。僕はこの二年の間に、桃を失い、チャイムを恐れ、引越すことになった。ひとでなしのはずのあおに比べて、まともに生きていた僕はいろいろなものを失ってばかりじゃないか。

「それでな」

あおの話はまだ続く。

「マキちゃんが抱いてる生まれたてのユキちゃんを見てな、これは超えたな、って思ったんだ」

「超えた……」

「うん、今まで生きてきた次元を俺は超えたんだなって。ただ一人で生きるだけじゃなく、人って生み出せるんだよ。そういうこともあるんだ。今までのやり方を超える」

ってどうか、分かる？」

「少しだけ」

僕は、桃の話を思い出した。――移動を縦にすることで人間は堂々めぐりの地球の旅を終えることができたわけ――。あおは何を超えたんだろうか。

「あおはタイムマシンをつくるのと、宇宙の外側に行くの、どっちが難しいと思う？」

「わっかんねえ。けど、一番尊いのは家族をつくることだな」

たつとい。まさかあおの口から尊いなどという単語を聞くと。「わっかんねえ」だけが僕の知っているあおだ。

しかし、こんなにしつかりとしたコミュニケーションを今更こいつと取ることになるなんて夢にも思わなかった。

僕は、あおの時間はいつまでも止まっているものだと思っていた。ずっと昔にあおが縫い閉じた僕の中身を、あお自身にほどかれていくように感じた。こいつはだらしがないし癪に障ることばかりするけれど、かつて僕らは確実に友達だったのだ。そういうことをすっかり忘れてしまっていた。

その後、僕らはただたどしくも初々しく、二十年の時を埋めるがごとくいろいろなことについて話し合った。魚の干物のように開かれた僕は、てらてら光る太陽に乾かさね、はじめは嫌な気分だったのに、次第に日向が心

地よくなってきた、こういうのもありかと思いはじめ、例えるならそんな気持ちだ。日干しされている魚はもつと複雑だろうか。

日が傾きかけたころ、あおは携帯を見て「帰らなきゃ」と言った。僕は曖昧な返事をした。

「今日はユキちゃん、風呂入るんだ」

そう言っであおはユキちゃんの画像にキスし、そのまま、すつくと立ち上がり玄関へ向かった。

ドアに手を掛け、靴を履きながら「あーあ」と呟いた。

「なに」と僕。何気なく視線を落とした先にはあおの靴があった。それは数億光年を歩いた旅人の靴に見えた。

「おまえとこんな話、するなんて思ってたな」

そしてあおは再び軽快に笑い、「要らないもの出てきたら電話しろよな」と言葉を残して扉の向こうへ消えていった。僕はぎざぎざの古傷をそつと触った。触れてみれば、それはただの模様だった。

桃はずいぶん前に行った。かつて僕の気を楽しんだ桃のゆくえは、果たして正しい答えだったのだろうか。桃が消えた方向とあおの向かった先が同じ方角を指し示しているような気がしてならなかった。

視線を上げ、古びたチャイムのことを思った。あおの煙草はカップの底に沈んだままだった。桃のクッションがあったところにはさつきまであおが座っていた。そこ

で僕は目を見張る。板間のはずのそこは黒い闇色をしており渦をまいていた。はじめ、あおから染み出た悪い部分だけが置き去りにされているのかと思った。しかしそこは空間がゆがんでいた。煙草の浸かったコップがカタカタと震えている。僕の携帯もカーテンも確かに震えていた。半年前から置きっ放しにしていた請求書が飛び立つ鳥のように床から離れ、闇に吸い込まれていった。風が吹くのは違う。上下が逆さになったかのように、重力にすべてのものが逆らえないように、その闇は周囲のものを引っ張っていた。僕は指先で闇に触れてみた。すると全ては容易に闇に溶け込み、やがて体をも飲み込んだ。そこは光すら逃さない、黒い穴だった。

吸い込まれた先には何もなかった。縦も横もない。湿度も温度も、基準となるものが何もなかった。そこは0の世界だった。恐ろしい気もするが、この先にはあおや桃がいるんじゃないだろうかという気もする。

しかし先には何も無い。体中が強度の麻酔にかかったみたいで、叩いてもつねつても何の反応も示さなかった。もしかしたら体なんて既に消滅してしまっているのかもしれない。自分をかたどる輪郭を意識しなければ、僕は潰れたスライムみたく、この世界のどこまでもだらしなく広がっていく気がした。それではだめだ。僕は歩いた。正しく言えば、歩いているような錯覚をした。右足を前に、左足を前に。今まで何十年もやってきたように。ふ

と、右手と右足を同時に出しているような気がして歩く錯覚を止めたが、よく考えてみればそんなことはどうでもいいことだった。馬鹿馬鹿しい。こんなところに桃やあおがいるはずがない。これは僕の中の黒い穴だ。思考の堂々巡り。道のない迷路。

なぜこんなにも真つ暗なのだろうか。光がないだけか、事実何もないのか。急に背筋が凍る類の孤独を覚えた。桃の死から止まってしまっていた感情が堰を切つてあふれ出す。なぜ桃の死にあれほど冷めた感情のままにいられたのか、自分でも不思議だった。何の迷いもなく思い出の品を捨ててしまえたのか。

僕らが離れ離れになってしまつてからも何年経つてしまったのだったか、そんなことすら忘れている自分はとても哀れな存在なんじゃないだろうか。僕は歩くのをやめ、座り込んだ。そういう錯覚だ。足をたたみ、頭を垂れた。目を瞑つて桃のことを思い出してみた。顔はよく思い出せない。髪型だって、服装だって曖昧だった。しかしそれは確実に桃だった。存在と枠組みが絶対的に桃だった。僕は桃にすがり付いた。

「ねえ、ここには何も無いんだよ。出口も入り口も無いにもない。こんなところどうやって出たらいんだよ」すると桃はチャイムの話の時の、あの多義的な笑いを見せた。しかし今回のそれは親が子どもを見るようなニヤンスが偏つて多く見えた。僕がそのように感じたの

は、おそらく自分が泣き出す寸前の子どものような顔をしていたせいだろう。

それから桃は少し困ったように視線を上げ、また僕に視線を戻した。そして人差し指で僕のぎざぎざ模様の左腕と、何もない右腕を順に指していった。僕はその仕草を黙って見ていた。それは桃とすごしていた日々と同じような感覚だった。

そして桃は一度右手を自分の方へ引き戻し、手のひらを上に向けて胸の前に広げた。桃の手にはいつの間にか小さな赤い実が乗っていた。それを人差し指と親指でつまみ上げ、僕に見せた。赤い実は、炎の塊のように燃え盛っていた。桃は、唇を動かした。何かを言っている。

——これは太陽。

赤い実は花火のようにいくつもの火花を散らしている。桃はしばらくそれを眺めてから、こちらへ向けた。桃の指が僕の唇を割り、実は口の中に入ってきた。

——身体は宇宙を入れる器。

僕は呆けた顔で首を傾げた。幼い迷子のように、流しっぱなしの涙をかまう余裕もなかった。喉が勝手に実を飲み込み、小さなそれが内へ下がっていくのを感じた。

それを見て桃は微笑む。その笑顔は無条件の安心を与えるものだった。そして数回、今度はさつきよりも複雑に、桃の唇が震える。そこにも声はなかった。

言い終わると目蓋の中の桃はあの雨の日のように僕

に背を向け、闇の先へ歩いていった。僕は目を開けた。そういう錯覚をした。

僕は自分の見えない身体の中を思った。そこではあの赤い実が、太陽となり燃えているのだろうか。

視線を上げる。すると極小の、しかし瞳を突くような光を目に受ける。遙か彼方に赤い実が浮いていた。あれはさつき僕が飲み込んだ太陽だ。ふと、両肩に重みを感じて、さつき桃に指差された腕を見た。左にはあおの模様の乗った腕が、右には何もない真っ白な未来のような腕があった。僕は立ち上がり、再び歩いた。それは錯覚などではなかった。鋭敏な五感は新調したてのようにピンと張り、行く手にある太陽は生命そのものだった。しかし光の届く限りの彼方まで見渡しても、桃の姿はなかった。最後に桃が伝えたことを思い出す。

——桃を探してごらんよ、

ここを超えたとこにいるから——。

うん。今なら行けると思う。待ってて。

呟いて、歩みを速めた。靴があおのようになるまで歩くつもりだ。あの靴は荣誉ある旅人の証だった。

桃。何もない世界ってありうるのかな。

宇宙ははじめ無だったと言うけれど、なぜ無からこの世が生まれたのかな。人は0を発見するのに、とても時間がかった。なぜ。0なんてありえないから？ 0の

世界って、それが仮にあるとして、でもそれって在ると言えるの？ 思った途端に0なんて消えてしまうんじゃないかな。それなら、そこに世界はないというべきだよ。

桃、僕の中のなかった世界に太陽をありがとう。今から行くから、そこで待ってて。

おいあお、もう僕を置いていくなよ。

りんごん。チャイムが響いた。

僕は自分の家の玄関にいた。蛍光色の夕日が窓から入り込み、扉を染めていた。どこかで夕暮れの虫が鳴いている。ドアスコープを覗いた。そこに桃はいなかった。僕は振り向いてリビングを見た。部屋は何の変化もない、いつもの見慣れた景色だった。あおの座っていた場所は単なる冷えた板間だったし、携帯も請求書もそのままそこにあった。僕はホッとしながら、心のどこかで落胆していた。そんなに簡単に来れるわけないよ、と言われた気がした。しかし、今見ていたものは一体、桃を探すって、だって桃は……。

そうして僕は、二十年前と同じように何気なく自分の腕に視線を移した。目を見張る。あおの縫い傷は妙な図形を描いていた。あおはあの日僕の腕に五つの頂点を持つジグザグ模様を描いた。しかし今、僕の腕の傷には山

を作るストロークが消えていて、十の点だけが残っていた。一瞬、手首に近い一番端の点が燃えるように光った。

ここを超えたところにいるから――

桃？

表でエンジンのかかる音が聞こえた。きっとあおだ。彼は車で来たのだろう。あのおおが車を持っていたとしても、それは至って当然のことのように思えた。

「おいあお」

僕は窓から身を乗り出し、黒い車体に屈み込むあおを呼び止めた。人でなしだったあおは2シートに憧れていた。しかしあおが乗り込もうとしているそれにはユキちゃんとかマキちゃんの分の座席もあった。そうやって彼は旅人たり得たのだろう。

「待ってろよ」

何をともどこでも言わなかった。

しかしあおはその言葉に応えるかのように手を上げ、笑った。そしてするりと車へ乗り込み、エンジンをふかして光年を行くような速度で先へ向かった。

彼の行く手には桃がいて、捨てたはずの文学全集を読んでいるような気がした。